

捨て童子
松平忠輝

上



隆慶一郎

す どう じ まつだいらただてる
捨て童子・松平忠輝(上)

りゅう けいいちろう
隆慶一郎

© Jun Ikeda 1992

1992年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185285-X

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

捨て童子・松平忠輝 (上)

隆慶一郎

講談社

紛 麒 川 鬼 序
争 麟 中 子 章
島

目
次

311 225 113 31 7

伴
啓一郎に

捨て童子・松平忠輝

(上)

序章

〈捨て童子〉という言葉の呼び起すイメージは、いつの世にもある単純な『捨て子』のそれではない。

貧困の故に、或は片親しかいないために、産みの親が窮して捨てた『捨て子』と〈捨て童子〉とは、画然と異った別物である。〈捨て童子〉には、この世のものならぬ異形の者、つまりは怪物・化け物のたぐいが持つ途方もないエネルギーが感じられ、その力が聞き手の胸の中に、一種の畏れと戦慄を産みだすように思われる。

事実、この言葉が使われるのは、伊吹童子、役行者、武蔵坊弁慶などの生い立ちを語る中世口承文芸においてであり、また大江山の酒呑童子の場合である。

酒呑童子の名は、後世になって、酒を愛し、酒に明け暮れる大酒飲みだから、名づけられたものだと解説されるようになってしまったが、元々は〈捨て童子〉のステがシュテと訛って『シユ

『テン童子』となったと思われる。このことはお伽草子とぎくさの〈伊吹童子〉が酒吞童子の前身は〈捨て童子〉だと書いていることで明かである。

では伊吹童子（後の酒吞童子）、役行者、武蔵坊弁慶に共通するものは何か。

それはまず不思議な誕生の仕方である。伊吹童子は母の胎内に宿ること三十三ヵ月にして生れたという。既に歯がはえ揃っていて、生れ落ちるとすぐ人語を話した。武蔵坊弁慶も三年三ヵ月、母の胎内にあり、歯ははえ揃い、生れ落ちるなりかっぱと起き上がり、

『あらあかや（やア明るいな）』

といい、からからと笑ったという。

後に修験道の開祖と仰がれた役行者、またの名、役小角えんのかづねは、一枚の花片を握って生れて来た、と伝説にある。

こうして異常な誕生をした者は、〈鬼の子〉と見られて、親、特に父親に恐れられ、狼や熊といった猛獣の棲む深山幽谷に捨てられることになる。これが第二の共通点なのである。この時、子供は大方は全裸のようだ。

そして第三の共通点は、こうして捨てられた〈鬼の子〉たちは、死ぬどころか平然として生き続け、彼を傷つけ喰う筈だった狼や熊が、逆に彼を養ってくれるという点にある。かくて遅おくしくも生き延びた〈鬼の子〉たちは、例外なく、人間とは思えぬ異様な力を身につけることになる……。

これを一介いっかいの伝説であり、夢物語にすぎないと見ることは誤りであろう。諸国に様々な形で語

り継がれたこの種の説話には、少くとも、語り手の心の裡なる異形の者への畏れという真実を含んでいる。そして異形の者は、明かにこの人間の世にいたのである。

松平忠輝は文禄元年（一五九二）正月四日、江戸で生れた。幼名辰千代。徳川家康の第六子である。

新井白石の『藩翰譜』に忠輝の赤ん坊の時の描写がある。

『世に伝ふるは介殿（忠輝のこと。上総介だったため）生れ給ひし時、徳川殿（家康のこと）御覧しけるに色きはめて黒く、皆さかさまに裂けて恐しげなれば憎ませ給ひて捨てよと仰あり』
『皆さかさまに裂けて』とは異様な表現だが、実際に赤子の忠輝を見た人物の証言によれば、その眼は『長く大きくさかさつりて』というから、つり上がって、見るからに恐ろしげだったようだ。

この描写は、明かに『鬼の子』の誕生を物語っていると思われる。

『憎ませ給ひて捨てよと仰あり』

これも父親の言葉としては尋常でない。家康は確かに我が子にとってかなり非情な父親だったと思われるふしが多々あるが、まさか生れたばかりの赤子を捨てろとはいまい。そうだとすると、新井白石は何故このような言葉を敢て使ったか。

私はこれを先のお伽草子その他諸国の説話をふまえた苦心の表現だったのではないかと思う。白石は忠輝が恐るべき異能異形の人物であり、しかもそのために自分の犯してもいけない罪業を一

身に負わされて流罪に処せられた、不幸な人物であることを、充分に知っていたのではないか。

白石が『藩翰譜』を書いた時期は、忠輝の死後十九年目の元禄十五年（一七〇二）である。十九年は決して遠い昔ではない。白石は忠輝という人物のもつ意味を完全に理解していた。だがその通り書くことは、はばかりが大きくて到底出来なかった。だからこそこのような奇妙な表現によって、ことの真実を伝えようとしたのではないか。

『鬼の子』忠輝は下野長沼城主皆川山城守広照に拾われ、その養子として育てられた。家康が忠輝を再び見たのは、忠輝七歳の時だという。

家康は一見して次のようにいったと伝えられている。

『龍鐘（龍種の誤りであろう）ツラダマシヒ、ソノママ三郎が幼稚立ニ少モ違ザリケリ』

龍種とは名馬・俊才・天子の子孫をいう言葉だ。三郎とは家康の嫡男岡崎次郎三郎信康である。豪気英邁、天才的な武將だったために織田信長に恐れられ、二十一歳をもって自害させられた人物である。家康が最も愛し、頼りにしていたにも拘らず、徳川家存続のために、我が手で殺さざるをえなかった件である。七歳の忠輝はその信康の子供の頃の面魂にそっくりだと感嘆しているのである。これは一体どういう意味であろうか。

徳川家康は生涯に十一人の男子を産ませたが、うち二人は早世している。残った九人の男の子を見ると、長男の信康、次男の結城秀康、六男の松平忠輝、十男の頼宣（後の紀州藩主南竜公）の四人と、三男秀忠以下五人とは完全に別の型に属していることが分る。

前者を英邁型^{えいまい}、後者を格勳型^{かくくん}と名付けたのは、家康研究の大家中村孝也氏だが、これを英雄型と役人型、破滅型と堅実型などと呼ぶことも出来る。そして、この英邁型に属する四人は、いずれも無事平穩の生涯を送ってはいない。

信康は根も葉もない武田家密通の咎^{とが}を受けて自殺させられた。秀康は十一歳で太閤秀吉の養子にされ(養子といえは聞こえはいいが、実は人質である)、その秀吉にさえ恐れはばかられて小藩結城家の養子にたらい回しにされている。三十四歳の死も果たして自然死だったのかどうか疑問がある。頼宣は將軍家光に恐れはばかられて生涯不遇のうちに過した。由比正雪事件の黒幕視されたことも、理由のないことではなかった。

そして忠輝は弱冠二十五歳にして流罪となり、以後なんと六十七年間、秀忠・家光・家綱・綱吉、四代の將軍にわたる永の年月を配所で過したのである。

『玉輿記』という書に、忠輝の人物について異様な記述がある。

『此人素生^{このひと}、行跡実に相強く、騎射人に勝^{すぐ}れ、兩腕自然に三鱗あり、水練の妙、神に通ず。故に淵川に入つて蛇竜、山谷に入つて鬼魅^{おにま}を求め、劍術絶倫、化現^{けげん}(神仏が形を変えて現れること)の人也』

これほどの人物を何故流罪に、それも永代流罪に処さなければならなかったのか。

或は、これほどの人物だからこそ流罪に処するしか方法がなかった、徳川家の事情とはなんであつたか。我々がこれから追おうとしている問題はまさにそこにある。

忠輝の生みの親はお茶阿の局つばねと呼ばれているが、この女性もまた尋常の生を送っていない。当時の女性にしては波瀾万丈、目を眩みはらせるような過激な生である。忠輝の人生に、この母の人生は大きく投影をしていると思われるので、まずこの女性の生きざまから筆を起したいと思う。

お茶阿の局の氏素姓は明かでない。様々な記録に共通している一事は、彼女の人生が東海道金谷の宿で始まるということである。

初めて歴史に登場して来た時、お茶阿はこの遠州金谷宿の鑄物師いもじの妻だった。既に三歳になる女の子がいた。お茶阿の亭主は山田姓の鑄物師ということしか分っていない。この亭主が代官に殺されたことから彼女の人生が始まる。

所伝によつて、お茶阿を山田四郎八之氏やまうちの娘と書いたものもあるが、河村氏と書いたものもある。実家は河村姓で亭主が山田姓というのが正しいようだ。徳川時代後期、俗に首斬り浅右衛門と呼ばれた据物斬りすえものの達人、山田浅右衛門は、この家系に属するといわれている。

それよりも重要なのは、亭主が鑄物師いもじだったということである。鑄物師は遠い昔わが国に渡つて来た帰化人の裔すえであり、本来は一所に定住することなく、全国を旅して歩いた漂泊の民である。鑄物師は、文字通り鑄物いもを造ると同時に鉦山師でもあった。金・銀・鉄などの鉦脈を発見採掘し、山間の村に思いもかけぬ富をもたらす奇蹟の人々だった。折口信夫氏のいわゆる常民に対する『まれびと』である。彼等は上に天皇をいただき、他のいかなる権威にも隷属れいぞくすることを欲しない自由の民であつた。

わが国の中世期には、実に多種多様な職業を持ち、一所に定住することなく全国を流れ歩く、

この種の自由の民が数多くいた。全国の自由な通行を保証され、税金は天皇にしか収めず、『上ナシ』と称して天皇以外のいかなる権威をも認めないこうした誇り高き人々こそ、天下人たらんことを望む戦国期の武将たちにとって、目の上のこぶのような存在だった。

戦国大名たちが城下町の建設に当って、いかに彼等の定住化・隸属化に腐心したかは、歴史に明かである。彼等がいかに果敢にこの隸属化に反抗して戦ったかも同様に明かに歴史に記録されている。伊勢長島・紀州・越前など、織田・豊臣政権に対して執拗な抵抗を続けた一向一揆衆の中に、彼等の姿が見られ、時として戦いの主導権を握っていたことは、今日では常識となっている。

お茶阿とその亭主の血の中には、この反権力の誇りが脈々と流れていたように思われる。以下の事件がそれを証明している。

幸か不幸かお茶阿は絶世の美女だった。痩せ細った今風の美女ではなく、豊満な感じの美女だったと思われる。

所の代官がこのお茶阿にぞっこん惚れこんでしまった。この代官の名は明かにされていないが、徳川家譜代の臣だったことは間違いない。どんな形でか知らないが、代官は足繁く通ってお茶阿を口説いたようだ。お茶阿ははねつけた。代官は亭主へも交渉してここでも手強くはねつけられたらしい。こんな形で権力の介入こそ、かつての鋳物師たち、誇り高き自由人の最も嫌忌・反撥するところだったから、これは当然である。

代官は激昂し暴挙に出た。お茶阿の亭主を捕え、無実の罪を着せて殺害してしまったのであ

る。杖死（杖で殴って殺した）とも鉄砲で射ち殺したともいう。

お茶阿の身がどうなったか、正確には分らない。代官が一応は手に入れたと書いたものもあり、いきなり逃げたと書くものもある。

とにかくお茶阿は三歳の娘の手をひいて、代官の手もとから脱出した。それもただ逃げ出したのではなかった。

当時浜松城にいた徳川家康の鷹狩りの帰途をうかがい、直訴じきそしたのである。

後世直訴は重罪となっているが、この当時でも簡単に出来ることではない。庶民の、しかも女性に、領主に直訴する勇氣はまずなかったと思ってい。それを敢てしたのは、亭主への愛情というより、やはり自由の民の血のなせるわざだったのではあるまいか。

この直訴した年代は不明だが、天正十四年（一五八六）以前だと思われる。

家康はこの母娘を浜松城につれ帰り、くわしく問いただした末、問題の代官とその配下の手代、金谷の庄屋たちを浜松に呼び寄せ裁判を開いた。代官は色々に申し開こうとしたが、理非曲直は自ら明かである。代官は死罪に処せられた。

家康はお茶阿の身を憐れに思い、浜松城で使うことにした。いきなり側室にしたわけではない。なんといってもお茶阿の身分が低すぎた。家康は側室に関する限り、豊臣秀吉と違って格別高貴の女を望んだことはない。特に初期の側室のほとんどは未亡人や家臣の妻だった。手近か之間に合わせたという感じである。それにしてもそれらの側室たちは一応は士分の者の出だった。

或は庶民の出かと思われるのは次男秀康を生んだお万の方^{かた}だけである。お万の方は正室薬山御前の侍女だった女性である。

とにかくお茶阿はとりあえず湯番を職としたようだ。『玉滴隠見』に、
『御行水役ヲ勤メラレシガ……』

とある。恐らくそこで家康の手がついたのであろう。なにしろお茶阿は美人だった。しかも家康の好む豊満型の美女である。手がつかなかったらおかしいようなものだった。

『ソレヨリ御側女^{おそばめ}ニナリ侍^{せむ}枕席^{まくら}（枕席ニ侍ス）』
と『將軍御外戚伝』にある。

お茶阿が忠輝を生んだのは文禄元年（一五九二）のことである。家康は五十一歳だった。家康は天正十四年十二月に城を駿府^{すんぶ}に移し、天正十八年（一五九〇）八月には更に江戸に移している。この二年後に忠輝が江戸で生れたということには意味がある。

この当時、家康は豊臣家の五家老の一人である。しかも文禄元年は秀吉の朝鮮侵寇のはじめられた年であり、家康は秀吉のそばにいた必要がある。家康が江戸城にいたのは正月から二月二日までで、以後は京都に行き、更に朝鮮攻略の前進基地である肥前名護屋^{なごや}に行っている。

文禄元年三月十七日京をたった家康は、肥前名護屋に着き、翌年八月後半までここに滞在している。

側室たちはすべて連れていった。この三月中に同じ側室のお牟須^{むす}の方は到着したばかりの名護屋の地で、難産のため母子ともに死んでいる。長い道中の無理がたたったのではなからうか。